

2018.9.1

現代俳句千葉

130号

巻頭エッセイ

人生は旅のごとし 幹事 小野 功



数年前に「月日は百代の過客にして行きか
ふ年も又旅人なり」で始まる『奥の細道』俳
聖松尾芭蕉の足跡を訪ねるツアーに参加した。

松尾芭蕉は、千住から大垣まで二千四百料
を百五十日余で移動した。東北と北陸を歩く
旅行記である。江戸時代の庶民の旅は主に徒
歩で関所（税の徴収や検問）を余儀なくされた。しかし、小生の旅は、

バス、新幹線、飛行機等で、徒歩による移動はせいぜい数百料であつ
た。しかも、全行程を踏破するのに足掛け二年間を要したのである。

「奥の細道」の芭蕉の足跡をたどる旅は、未だに人々に愛されてい
る。その由縁は、「奥の細道」で詠まれた俳句から、その美しさが伝
わる為と云われる。「相手に物事を正確に伝える表現の力」は傾注す
べきである。芭蕉の立寄った場所は観光名所となり、平泉の中尊寺金
堂は世界遺産である。等々。

旅立ちの第一歩は、芭蕉縁の地、深川の萬年橋だった。春の嵐に見

舞われて、ずぶ濡れの旅立ちとなる。時として冬の霰に遭遇し天変地
異さながらだった。体調を乱してツアーを途中で断念、帰宅したこと
もあつた。

芭蕉の足跡には句碑が建ち、大伴家持や西行法師等の古人が詠じた
歌枕の地も訪ねる。当地の学芸員による説明を受けたり、はせを（芭
蕉）の短冊や貴重な「素龍本」等も拝見することができた。

石巻では、東日本大震災の爪痕も生々しく日和山公園の高台に立ち、
全員で黙祷を捧げた。

道中、私の詠んだ句（毛越寺の朝の勤行若葉風）（良寛像頭ひとな
で油蟬）（親不知怒濤のうしろ秋輪廻）（墨染の冬の結界永平寺）（象
潟の全景として夕霰）等である。

昨年は、大和の山野辺の道を歩き神仏と語らう（春秋の阿修羅眉間
にある敵意）最近は、四国巡礼の遍路旅、八十八ヶ所を三周目に挑戦
中、（空海の姿たしかむ花明かり）

まだまだ人生の旅は続く。

目次

人生は旅のごとし 小野 功	1
諸家近詠	2～4
私の感銘句	5～8
津田沼研究句会報告	9
青葉研究句会報告	9～10
柏研究句会報告	10
新入会員紹介	10
図書紹介 ひろば	11
会員・会友の近況	11～12
掲示板	12

千葉県現代俳句協会会報

諸家近詠

小池美佐子

決りなき落ちた椿の並び順
ひまわりの楕円のテール取り仕きる
葛引けば顔の認識おぼつかない
水仙の果ては淨土かまぼろしか
遥かなる雪解水から紀行文

泉 志眞子

更衣過去はそのままついて来る
廃線の先は故郷柿の秋
ひとり降りる夕蝸の無人駅
国宝をめぐる大和路蟬しぐれ
単線の灯りだんだん遠く秋

佐久間眞城

このような世になりました敗戦忌
戦なき沖行く艦や敗戦忌
衣被他人に語れぬ恋をして
会者定離知らないように星月夜
人生は今や百年曼珠沙華

白井 春こ

身体の屈折処春めいて
くちびるに芹の登場ひとりごち
芍薬の花の背をみよ歩くべし
万愚節爪は裸のほうがいい
緑からみどりへ易き人生論

高坂 健

菊人形大河ドラマの役者です
尽きるまで野原さまよう冬の蝶
今生きるそれだけでいい去年今年
サンダルは裸足がいいねえ夜の街
人日や延命治療おことわり

小林 雪枝

雛壇のうしろ救急車のサイレン
銀行出て桜並木を素通りす
親子でも他人でもない春の雲
二階から咳下りてきて地下へ行く
(四句掲載)

鈴木 郁子

二日の夢月の兎とロケットと
初泣きにホーレン草の冬芽立つ
指先より暮るる冬菜のけぶらえる
スケートに賭ける狩衣コスチューム
ひとつずつもらう太陽蜜柑山

高橋 宗史

人の顔つて眼のことさ冬の星
淋しさの隠すところ無き漱石忌
表面張力雪は水の親戚
天と地の倒錯枝垂れ桜かな
泣くな妻桜が雨に濡れたとて

千葉 信子

みどりごの真水のやうな汗ぬぐふ
しろがねの旋律からす瓜の花
月蝕や娼婦のやうに落椿
母に似て青虫のごと押し黙る
嫁がきてドクターがくる更衣

高橋富久江

蛇穴を出る素的な出会い期待して
組紐のかたりことりと伸びて春
亀鳴くを待つ欄に睡魔来る
貝母咲く鰻通した父の庭
死ぬ迄は生きるが仕事やいと花

関 千賀子

うすらひは烏天狗の涙とも
春の月寄生つきつぎと上げにけり
さくらの夜エンドロールの微熱かな
矜羯羅のぶいと横向く秋の天
綿虫や祖谷に流るる粉ひき唄

千葉 智司

風挽歌枯野の沖を葬の列
蒼鷹や杭一本の非武装地
冬蝶の呪文古墳の謎解けず
狐火は女衞の墓のある辺り
伏線を震わせてゐる冬の蝶

富田 茂

車窓より薫風走る腕の上
花菖蒲嫁入り舟の残す泡
通学路黒髪駆けて白紫陽花
五月雨にテレビを覗き大笑い
長電話夏の日盛り武者修行

戸邊 光一

溪の湯にいて拘りを解く新樹
滝飛沫消しても消しても罪一つ
濃紫陽花開け放されし寺の門
溪深く来て滝音に敗れたり
風あれば人心一新花菖蒲

田口満代子

鴨や鶴や朝のなごりの椅子たたむ
うしろ手に葦を隠し冬將軍
たそがれの胸近に蠟梅と鴨と
師と歩むトロヤ遺跡の芥子の花
加齢ふと眠ってばかりいる金魚

嫁ぎ来し茨の道や春の風
 低空の銀翼一機梅雨晴間
 熱帯の夜はベリージャムの色
 さわやかを独り占めして野良仕事
 無人駅柿万灯のお出迎え

大地 節子

たけな華那

あれは鴟母は話しを千切れさせ
 皂莢拾うべたべた可愛がる
 深深とオシッコまだ九月の水平線
 秋の蚊をあつめてしまふ脳神経
 実は美佛アオキの葉にはよろける斑

永井アイ子

大樽の籬あをあと流水来
 焼印はど真ん中なり春の雪
 鋸に灯りを映し梅雨兆す
 バケツの水風が凹ませ燕来る
 夏負けて草間弥生の中に居る

高橋由紀子

土竜の子そこは野すみれ咲く所
 脳トレの鍵と鉛筆春の昼
 禅寺のへこみし魚板梅雨湿り
 振り花ねじれの訳は聞かずをく
 菩薩にも生命線あり涅槃西風

長濱 聰子

夏至近し水平線に陽の鍾り
 水中花女の余熱尽きるまで
 父と子の黙の深さや蟬時雨
 本能と遊び疲れてきりぎりす
 夫よりも生き逆光の花野道

露味嘈やひくひくと人泣きやめり
 母喋っているか夏着に袖とおし
 羽抜鶏ギヤバジンの服吊るされて
 陰干しのどくだみの葉と父の聖書
 岩波文庫の「坊ちゃん」を抜く羽蟻の夜

高橋 公子

中里 結

竹皮を脱ぐやはがねの音したり
 夕富士や姫春蟬も鳴き止んで
 ががんぼを封じ込めたる草木図
 声かけてもらつて伸びる糸瓜かな
 釣人の空身で帰る稲穂波

中嶋 三雄

早乙女や支流東なす日田盆地
 八十八夜コンビニで納税す
 べつびんの章魚を選りたる港町
 名画座は総天然色春深し
 渡り漁夫三国は格子多き町

関根 信三

歳晩や書架に古びし資本論
 手に触れるものそれぞれに秋の音
 稲の花空に大きな喉仏
 流星を見にまた来よと父母の墓
 マフラーが句会の匂い持ち帰る

徳田 悠子

しとど雨吠え鹿の声遠のきて
 セントバーナードとりあえず吠ゆ春団地
 細密の空抜け出でよ合歡の花
 墓じまい五月は風のパンケーキ
 鉄仙ののっぺりと紫紺詫び状に

耳は遠い日のかけらカンナまつ赤
 水無月を眠る喪つた日を眠る
 終わつたところこかで思う夕端居
 紫陽花やまだある咎をしまいこむ
 セロファンを表紙ほるほる書を曝す

直江 裕子

武田 和郎

電池替え即立春を指す時計
 発想は昼寝の中に逃げこめり
 日本は夜長俳諧が欠伸する
 漉き込まれたまたの世の色返り花
 蓮穴の向うは雪の北斎富士

長井 寛

東向くひまわり西向く荒凡夫
 玫瑰の咲いて今年の供花とせり
 補陀落へいつたりきたり昼寝覚
 湧水のまなかの靨夏深し
 緑蔭の歌人となる陶淵明

中澤 一紅

何しても器用になれず新茶汲む
 限りなき湖の青さよ夏に入る
 しずけさを破る夜明けの牛蛙
 一切を省略したる練供養
 折紙もりハビリなのか夏座敷

永井 奈々

黙々と夏喰うてをり吹いてをり
 過去はひらがな里山は深みどり
 黒鍵にふれたる釣瓶落しかな
 旧道は農協のまえ芹ふかふか
 春あられ番場峠のはずみけり

諸家近歌

高橋 健文

付けつ放しの国会中継春眠し
徳利を三本寝かす桜の夜
これからの生き様桜散り初むる
百年はすでに来てをり桜守
物干しになびくTシャツツ豆の花

富澤ムツ子

はんざきの傷跡までも妣にそっくり
ボート漕ぐ少年男の鬚り見せ
前髪を斜めに切つて星の恋
夕端居猫に教わる風の道
愛なくて何の秋刀魚ぞほろ苦し

多胡たかし

上州に生まれし矜持冬妙義
通学のころの記憶や空つ風
単線の駅へひと筋枯野道
総身の力抜ける困炉裏端
冬椿散るひとひらの重さかな

中村 冬美

如月の骨のきれいな魚を割く
花臘梅みのらぬ恋の上下巻
いにしへの夢のつづきの花臘梅
月欠けて誰が仕掛けた狐畏
海の日の海を遠くに私はかもめ

中村 棹舟

冴えかえる独りの魂の置きどころ
仏壇の花入れ換えて春惜しむ
灯台が見たくて伸びる月見草
ふるさとの調子そろえ卯浪立つ
待つ人もなき岩蔭の月見草

田沼美智子

白牡丹気を蔵している崩れかな
たましいの真中触れている冬の蜂
この顔も保存しました冬用意
レム睡眠枕をたたく鯨の尾
水中花ひらく伴侶の水のなか

坂本千恵子

父の顔にどこか似て来る盆の月
強風に根もと揺るがす乱れ萩
醉芙蓉少女の恋と解いてみる
朝霧の中に消えゆく男の背
一生をここで終えると秋茜

高桑婦美子

炎天に影黒くなる白くなる
身の丈で渡るこの今蓮開く
尊厳を秘して花なり蓮の池
散蓮華この世の風がなつかしい
この今の姿を生きる枯蓮田

永妻 和子

ふるさとの風を待ちおり蝸牛
青芒カルテに赤線引かれおり
初茄子水の重さを掬いけり
万緑や人を愛して全うす
梅雨傘や友と小走り登校す

高木 一恵

定住漂泊おぼろ狐の尾の千切れ
さよならの無くて薔薇より濃き別れ
被爆マリアの眼窩は噴井汲めど尽きず
行雲ふと淋しいと師や河を抱き
菜の花は黄色とみどり君在りて

なかもと淑子

蒙古斑あさつて春が来るといふ
春日の廃屋ユンボに叩かれて
お帰りと迎える人形春蘭ける
梅雨晴れ間隣の家の子沢山
たこ胡瓜出合いの妙や江戸切り子

中村 博子

初葉師命の水の柔らかし
黒潮の波が穏やか紫羅欄花
竹皮を脱ぐダーウインの種の起源
夕刈田土の匂ひの戻りけり
立冬の残照天つ風の中

高久 清美

我が影は私の近似値月の道
良夜なり曇りやすきは母情とも
魚影めく水の木洩れ日秋の蝶
秋江やポットホルの迷ひ石
セザンヌの林檎のやうな秋思かな

千野湘山人

きざす暑に明日を約せぬ命かな
腰痛や熱中症におびへ臥す
暑が残るシヨパンの夜の一人の茶
蟻塚や履物いくつ躰口
零余子飯母より妻に伝はりし

中村 直子

錠剤の黄色ころがり女正月
たましいのまつすぎ真昼青鷹
父の山鬱蒼とありひきがえる
顔洗う水やわらかく今朝の秋
十二月八日節穴から朝日

私の感銘句

相原 一枝 作者名 号頁

映す山なき下総の田水沸く 越野 雄治 124 2
 三角四角丸く収めて月見 白井 春こ 124 2
 八月の六日九日水を呑む 高橋 宗史 124 2
 万象の一部となりて初日待つ 鈴木 和子 124 4
 うまこやし冠にも紐にもなれる 森村 文子 126 2
 ふくらはぎ揉んでこの世の夏に入る 村上 澄子 126 4
 そこばくの余生を得たり葱坊主 松下總一郎 126 4
 虚ろなる風のかたちの蛇の衣 長井 寛 127 4
 白菜を割れば踊る観世音 井上けい子 127 5

長井 寛

さそり座をすしずらして野分来る 田口満代子 124 3
 レントゲンわが秋愁も映しけり 高橋 節夫 124 4
 吊橋を猪来るよくよくの夜であり 武田 伸一 125 8
 敗残兵兜太「アベ政治を許さない」 並木 邑人 125 8
 轉りを聞き分けているパンの耳 直江 裕子 125 9
 戦争せぬための戦争ありか春の暮 鳴戸 奈菜 125 9
 春が生まれ春が歩いてくる廊下 藤田 富江 126 3
 日日草裏も表もない生活 三須 民恵 127 4
 蝶は一頭兎は一羽はこべ摘む 相原 一枝 127 4
 白菜を割れば踊る観世音 井上けい子 127 5
 敗残兵兜太「アベ政治を許さない」 並木 邑人 127 5

と記す。きな臭い匂いのする安倍政治を許してはならないと訴える。輝かしい俳句の足跡と同時に戦争反対の気高い精神は評価に値すると並木氏は師の業績を称えている。

瀬尾 教子

夕空広く白木蓮へ帰る 杉山真佐子 124 3
 密談の卓に蜜入り冬林檎 椿 良松 124 3
 闇を濾過して白桃の育ちゆく 荒木 洋子 125 8
 立ち話案山子は旅の途中という 普川 洋 125 8
 白日傘浮雲となる大砂丘 倉岡 けい 125 9
 自己主張強くて孤独白つばき 三苦 知夫 126 2
 人形の手が伸び拾う落し文 藤田 守啓 126 4
 糸瓜揺れ明日のことは風のまま 飯島 昭子 127 5
 しんじゅくで別れてからの雪の山 山崎 聰 127 5
 田を植えてつくづく今日を見ておりぬ 石井紀美子 127 6

藤岡 尚子

酒を酌むだけの弔い寒椿 徳吉洋二郎 124 3
 麦秋や大きな声で叱られて 鈴木 瑩子 124 4
 戦争は本で知つてるあぶら蟬 中嶋 三雄 125 8
 大白鳥空の動悸が止まらない 羽村美和子 125 9
 鉛ぶくろ石段擦つて七五三 広瀬 梯子 125 10
 午后からは無人改札鳴日和 矢野 忠男 126 3
 浮浪雲引き寄せ安房の初時雨 水戸 吐玉 127 4
 原つばにだあれもゐないお正月 松沢 貞津 127 4
 白木蓮の世を蔽ふかに今朝をあり 相原 一枝 127 4
 庭師来て空を整へ秋あかね 山崎 幸子 127 5
 麦秋や大きな声で叱られて 鈴木 瑩子 127 5

息子が小学生の頃、担任から叱られた。意に染まぬ叱責だった様子に私は言った。「明日の朝、大きな声で『お早ようございます』って先生にご挨拶なさい」と。翌日は明るい顔で帰宅。気持ちを受け止めて下さった担任に二重の感謝であった。上五にある「麦秋」の鮮やかさに叱られたスッキリ感がよく表れていて、読む方もスッキリ!

岡田 淑子

種袋種と空気といっしょくた 武田 伸一 125 8
 「星狩」の青のプリズム蝶潜む 野口 京子 125 10
 干されれば笑うしかない目刺かな 保坂 末子 126 3
 昭和の日昭和をけずる乾物屋 矢野 忠男 126 3
 夏蝶追う男はいつも半ズボン 星野 一恵 126 4
 終活も就活も良夜かな 秋谷 菊野 127 4
 梅雨のコードからまり応仁の乱 吉野 精 127 5
 しんじゅくで別れてからの雪の山 山崎 聰 127 5
 子規の忌やたつぷりと張る風呂の水 青木 一夫 127 6
 草に手を切られて八月の自覚 市川 唯子 127 6

山崎 幸子

鵲外の不機嫌な髭青山椒 越野 雄治 124 2
 すぐ乾く汗のTシャツ敗戦忌 高橋 健文 124 3
 夏が来る水平線を引き直し 徳吉洋二郎 124 3
 私は吾を好きになりたし残る花 鳴戸 奈菜 125 9
 ねこじゃらし風の縁者と答えおく 羽村美和子 125 9
 四葩咲く杓子定規な人の居て 実初 繁 126 2
 屋星の落ちて椿となりゆけり 長井 寛 127 4
 ゼロ戦の転生なりし夏の蝶 吉野 精 127 5
 百兆の腸内細菌夏旺ん 内田 庵茂 127 6
 われも昔ネオリアリズム泥鰌かな 山中 葛子 127 6

屋星の落ちて椿となりゆけり 長井 寛

日中は太陽光線が強いので宇宙に存在する数多の星々は我々には見えない。それでも屋星は存在する。その星が落ちると椿になると詠み、それ以外のことは何も述べず読み手に委ねる。心象句と受け止めると俄然その風景が広がる。そしてそれは赤の大輪の椿であると私は読む。あれこれと想像の世界が広がり印象の強い作品である。

佐藤 映二

- 鉛筆を削り言葉を削る夏 森 章 127 4
 - 父の日の庭石一つずらしけり 松沢 貞津 127 4
 - ひまわりの千の沈黙地震の海 若林 佐嗣 127 5
 - 銀やんま石棺の縁囃みいたる 宇佐見房司 127 5
 - 梅雨長し星の缶詰開けようか 吉野 精 127 5
 - 蟬時雨バンドネオンは膝で弾く 市川ふみを 127 5
 - ひとりならついておいでよひきがえる 山崎 聰 127 5
 - 宇宙への起点となりし曼珠沙華 青木 一夫 127 6
 - 田を植えてつくづく今日を見ておりぬ 石井紀美子 127 6
 - うらけしのつと霊長目ヒト科 山中 葛子 127 6
 - ひまわりの千の沈黙地震の海 若林 佐嗣 127 6
- 元は農地だったかもしれない一面の向日葵畑。
その先は海。花々は人間・家畜・野生動物らの貌を帯び、怒りと悲しみとやり切れないさを無言で訴えている。それは東日本大震災と福島原発の人災による放射能被害の先の見えない不安の日々を見据えているようだ。(地震の海)は、海底深く地殻を形成するプレート同士のずれという、地質学的な年代の中で何度も繰り返されてきた冷厳な事象を端的に表しているよう。

井上けい子

- 八月の六日九日水を呑む 高橋 宗史 124 2
 - 明日こそ明日こそや木の根開く 栃木 きよ 124 3
 - 寒夕焼カフカの城の確と在り 徳吉洋二郎 124 3
 - みちのくの沈みきれない紙の雛 高木 一恵 124 4
 - この世よりあの世が恋し月今宵 高桑婦美子 124 4
 - 片蔭は癒えゆく母の渚です 高野 礼子 124 4
 - 流失の公衆電話に人の列 並木 邑人 125 8
 - あどけなき疾うに捨てたる葱坊主 野口 京子 125 10
 - 夕日墮つ終戦の日の特攻機 松澤 龍一 126 2
 - 土間といふ昭和秋灯明る過ぎ 伊藤 希眸 127 5
 - 夕日墮つ終戦の日の特攻機 松澤 龍一 127 5
- もう古いと思う方も大勢いると思うが、この「夕日墮つ」の句は重い。「終戦の日」に(当日の早朝に日本の降伏は決っていた)何故若者の特攻機が飛び立ったのか。命令を下した上官の罪は重い。永久に人間として責めを負わなければならぬと思う。
- 「夕日墮つ」の五音がまことに哀しい。その哀しみが簡潔によく現されていると思う。

永井 奈々

- 硝子切る音も紙裂く音も寒 千葉 信子 124 2
- 吊り革はひとりにひとつ終戦忌 徳吉洋二郎 124 3
- 手袋を振って一瞬通じ合う 鈴木 郁子 124 3
- 囀りを聞き分けているパンの耳 直江 裕子 125 9
- 修正のきかぬ自画像野火走る 富澤さち子 125 10
- 望遠鏡のぞけば少年の六月 森村 文子 126 2
- 図書室の机にひとりづつ昼寝 前島きんや 126 3
- 野原の近況夏雲の半分 三須 民恵 127 4
- 葱坊主わつさわつさと子育て中 イザベル真央 127 6

草に手を切られて八月の自覚 市川 唯子 127 6

小川トシ子

- 霜月をこじ開けて来る赤ん坊 並木 邑人 125 8
- この橋の向こうは戦後冬桜 中村 直子 125 10
- ポルトガル想えば春の金平糖 西澤 繁子 125 10
- 亀鳴くやお袋という無限大 長濱 聰子 125 10
- 自己主張強くて孤独白つばき 三苦 知夫 126 2
- 身のうちのどこに触れても冬の川 山口 彩子 126 4
- 人形を抱く子を抱きぬ芒原 渡辺 澄 127 5
- 盆の月あれも大きなたまごやき 山崎 聰 127 5
- 薔薇の夜罪の匂いのふとしたり 石井紀美子 127 6
- 夕焼をはがいじめする純老女 山中 葛子 127 6

東 國人

- あの世から見られて日傘傾ける 小林 雪枝 124 2
 - まんえふにぼるんのおほしとほかはづ 中嶋 三雄 125 8
 - 敗残兵兜太「アベ政治を許さない」 並木 邑人 125 8
 - 奨学金返済背負ひて卒業す 棗 楯伊 125 9
 - 車椅子華麗にターン春きざす 菊池 和子 125 15
 - 冥土への引越準備涅槃西風 村田黙己春 126 2
 - 天上薔薇園知っている人はかり 森村 文子 126 2
 - 海よりの風を商う風鈴屋 森 孝子 126 2
 - 図書室の机にひとりづつ昼寝 前島きんや 126 3
 - 色づかぬうちは紛れて烏瓜 森 章 127 4
 - まんえふにぼるんのおほしとほかはづ 中嶋 三雄 127 4
- 万葉の時代、日本語には、現代人が発音できないくらい多くの母音が存在したという。その点に着目し、一句全体を「ひらがな」かつ「古語」で表現したその表現方法が斬新であり、おもしろい。会津八一の作品を彷彿させる。「と

ほかはづ」により俳諧感が滲み出ている。

松崎あきら

丹頂喰らう猷美しその丹頂も 竹中 華那 124 4
 闇を濾過して白桃の育ちゆく 荒木 洋子 125 8
 まんふにばるんのおほしとほかはづ 中嶋 三雄 125 8
 露を煮る骨が空気を欲しがって 倉岡 けい 125 9
 大白鳥空の動悸が止まらない 羽村美和子 125 9
 紙皿のアイスクリーム病んでいる 松澤 伸佳 126 2
 谷分かつ日陰日溜り石露の花 藤岡 尚子 126 3
 三行の葉書に華押す虫鳴く 伊藤 希降 127 5
 追伸を書こうよ虹の消えぬ間に 青木 一夫 127 6
 われも昔ネオリアリズム泥鰌かな 山中 葛子 127 6
 われも昔ネオリアリズム泥鰌かな 山中 葛子

主義・思想というものも流行のようなもので、
 その時には「〇〇でないものは〇〇ではない」
 的に思っているものだが、アートという巨大意
 志の前では一匹の泥鰌に過ぎなかつたと後で気
 付く。「ナンデモアリ」のアート世界はみんな
 呑み込んでしまつて、一時波が立つたというだ
 けの様子：：そうか、そうだ、それでいいんだ。
 だつて私、一匹の小さなアートの泥鰌だもの。

岡田 春人

折鶴になる処方箋寒北斗 小林 俊子 124 2
 赤ちゃんの涙は直球木の芽ふく 栃木 きよ 124 3
 補陀落に野太き梅や一周忌 木之下みゆき 124 4
 自己主張強くて孤独白つばき 三苦 知夫 126 2
 春が生まれ春が歩いてくる廊下 藤田 富江 126 3
 乳房挟む板の無機質盆の来る 松岡 節子 126 4
 遺骨なき墓に無念の曼珠沙華 松本 静頭 126 4

有る筈の無い菌が痛む寒夜かな 渡邊 廣子 127 5
 梅雨長し星の缶詰開けようか 吉野 精 127 5
 百兆の腸内細菌夏旺ん 内田 庵茂 127 6
 春が生まれ春が歩いてくる廊下 藤田 富江
 「廊下」というと、渡辺白泉の「戦争が廊下
 の奥に立ってゐた」を思い出す。しかし、この
 句はそんな不穏な空気とは別に、あたたかい春
 の訪れを全身で感じている。その廊下は、木造
 校舎の廊下を想像する。午後の授業が始まつて
 誰もいない廊下に、春の日が差し込み、風も入っ
 てきている。平和であたたかい廊下である。

加藤 法子

夏が来る水平線を引き直し 徳吉洋二郎 124 3
 寒潮きらきら熊野訛きらきら 木之下みゆき 124 4
 1Fとは原発のこと冴返る 並木 呂人 125 8
 血脈に不連続線みみず鳴く 長濱 聰子 125 10
 基地にへり建国記念日波高し 三苦 知夫 126 2
 逆さまに雑誌見てる子百日程 森 孝子 126 2
 遠足の二列最後まで二列 馬淵 津枝 126 2
 缶切りを忘れ万緑に叱られる 細野 一敏 126 3
 ひとし逝く苺爛酒置いてゆく 矢野 忠男 126 3
 田を植えてつづく今日を見ておりぬ 石井紀美子 127 6

石井紀美子

もののふの一本の道寒椿 鈴木まんぼう 124 3
 八月の遠い出口を白い象 徳吉洋二郎 124 3
 紅椿負けられません負けません 坂本千恵子 125 8
 戦争せぬための戦争ありか春の暮 鳴戸 奈菜 125 9
 雲の峰黙は女の挑戦状 長濱 聰子 125 10
 北に行く夜汽車の音や星祭 細野 一敏 126 3
 ひとし逝く苺爛酒置いてゆく 矢野 忠男 126 3

血液さらさら炎天のぐらぐら 細根 葉 126 4
 奔流となりし加齢や初日記 保坂ミエ子 127 4
 追伸を書こうよ虹の消えぬ間に 青木 一夫 127 6
 奔流となりし加齢や初日記 保坂ミエ子

年齢を積み重ねた人ならではの深い感慨の一
 句。過ぎてみればなんと早い人生であったこと
 か：そしてこれからの厳しい年齢、奔流とはまさ
 に言い得て妙である。若い時とは異なる覚悟と
 感性が息づいている。

季語に内蔵された姿勢、作者の強さと気高き
 存在の静寂が心地好い。

徳吉洋二郎

丹頂喰らう猷美しその丹頂も 竹中 華那 124 4
 獅子奮迅の陽炎が熊野から 木之下みゆき 124 4
 隣室の気配アゲハは羽化したり なかもと淑子 125 10
 自己主張強くて孤独白つばき 三苦 知夫 126 2
 どの橋も未知の入口冬銀河 水野 禮子 126 2
 西日濃し缶をこきりと角打屋 細野 一敏 126 3
 きな臭き昭和の軋み雁来紅 山崎 幸子 127 5
 白靴のできる夕餉に帰ること 渡辺 澄 127 5
 原爆忌人間困つた動物だ 吉野 精 127 5
 葱坊主わつさわつさと子育て中 イザベル真央 127 6
 獅子奮迅の陽炎が熊野から 木之下みゆき
 作者の今回発表の五句にねじ式、熊野、普陀
 洛、梅という言葉が煌めいている。これらは大
 畑前会長を思い出させる一語一語である。多分
 一周忌にあたり詠まれた追悼句であろう。
 五句どれを読んでも大畑氏が偲ばれてならな
 いが特に掲句の獅子奮迅はまさに大畑氏そのも
 のであり、陽炎となり熊野の山を揺らしている

と云う、なんと思いの深い追悼句だろう。しみじみと読ませて頂いた。

山中 頼子

遠吠えを角出して聞かたつむり 小多田文子 124 2
 空の青信じて堅し路の臺 高木 一恵 124 4
 秋刀魚焼く遠い記憶の火吹竹 高桑婦美子 124 4
 敗残兵兜太「アベ政治を許さない」 並木 邑人 125 8
 一輛の開のボタンを押して春 永井 奈々 125 9
 雲の峰黙は女の挑戦状 長濱 聰子 125 10
 どの橋も未知の入口冬銀河 水野 禮子 126 2
 春が生まれ春が歩いてくる廊下 藤田 富江 126 3
 風止みて芒は影を繕へり 水戸 吐玉 127 4
 ゆうやけを掃き寄せている部活の子 石井紀美子 127 6
 一輛の開のボタンを押して春 永井 奈々

中七の「開のボタン」という表現がうまく季語を導いていると思いました。一輛の列車ということからローカル線ののどかな様子が浮かびます。沿線には菜の花が咲き始めていることでしょう。私の住む市原でも私鉄が北から南へ縦断するように走っています。春にはトロッコ列車が走ります。

春の景色をいつばい乗せて軽快に走ります。そんな風景を連想し楽しく鑑賞しました。

イザベル真央

双六の上りに母をまたせおり 栃木 きよ 124 3
 吊り革はひとりにひとつ終戦忌 徳吉洋二郎 124 3
 みちのくの沈みきれない紙の雛 高木 一恵 124 4
 敗残兵兜太「アベ政治を許さない」 並木 邑人 125 8
 生きるからゴミ出る鴉カアカアカア 鳴戸 奈菜 125 9

午後からは無人改札賜日和 矢野 忠男 126 3
 東浪見駅の前にとらねこ冬日向 三宅たくみ 127 4
 にんげんは顔が正面サングラス 渡辺 澄 127 5
 原爆忌人間困った動物だ 吉野 精 127 5
 浮かぶ柚子沈めてはまた浮く平和 東 國人 127 6
 原爆忌人間困った動物だ 吉野 精

人間困った動物だ。生き残る為の戦争好きな男たち。縄張り争いは今も終らない。人間の最後は人工知能なのか。困った困った。

なかもと淑子

あの世から見られて日傘傾ける 小林 雪枝 124 2
 夏が来る水平線を引き直し 徳吉洋二郎 124 3
 母子像の一指に触れて年惜しむ 鈴木 郁子 124 3
 補陀落し野太き梅や一周忌 木之下みゆき 124 4
 結びを借り返して飛驒の秋深む 田端 重彦 125 8
 春寒料峭盆がひとつ余る 檜垣 梧樓 125 9
 喪服着ると確かに亀の鳴きにけり 林 ゆみ 125 9
 あぢさゐの重なる穂の明るさよ 深山きんぎょ 126 3
 梅雨長し星の缶詰開けようか 吉野 精 127 5
 夕焼をはがいじめする純老女 山中 葛子 127 6

中村 博子

霧を出て霧を求むる心地かな 島田 葉月 124 2
 八月の六日九日水を呑む 高橋 宗史 124 2
 胞衣壺の仄かな絵図や十三夜 関 千賀子 124 4
 金盞花畑に溢れて日は海に 中里 結 125 9
 芹の青根つこの先までがふるさと 直江 裕子 125 9
 簡潔にも言う素足なればこそ 倉岡 けい 125 9
 谷分かつ日陰日溜り石路の花 藤岡 尚子 126 3
 一番に足出す蛸蚪よおとうとよ 松岡 節子 126 4

ひまわりの千の沈黙地震の海 若林 佐嗣 127 5
 薔薇の夜罪の匂いのふとしたり 石井紀美子 127 6
 八月の六日九日水を呑む 高橋 宗史

私は戦争の記憶はない。小学生の時「原爆の子」という映画を見て原爆の悲惨と戦争の不条理を初めて知った。被爆した方々が水を求めて亡くなって行ったことも。

作者は広島忌、長崎忌と置かず原爆の投下日を八月六日九日と表現したことで逼迫感がある。今、当り前に水を飲めることの躊躇いと罪悪感そして幸せを緬い交ぜにし不戦の誓を強く主張している。鋭い句に共感を覚える。

◆ 秋の吟行会のお知らせ ◆

日時 平成三十年十月二十九日(月)
 場所 レト口な城下町「君津市久留里」
 会場 上総地域交流センター(上総公民館)
 句会場 (詳細は同封チラシを)ご覧下さい。
 (詳細は同封チラシを)ご覧下さい。
 *来春の新春三吟行会を一月二十三日(水)成田山で予定しています。
 (詳細は次号でお知らせいたします。)

◆ 平成三十一年度俳句大会 ◆

作品募集!

締切りは平成三十一年一月三十一日です。お早めにご応募下さるようお願いいたします。(詳細は同封チラシをご覧ください。)

津田沼研究会報告

(於：津田沼一丁目町会会館)

第三一二回 (平成三十年五月九日)

司会 佐藤 晏行

みつ豆のブリキの匙や神保町 岡田 淑子
 鳥雲に納豆の糸まだのびる 横須賀洋子
 五月晴かけ違いのままに生きる 白木 暢子
 テーブルの三人惚け初夏の風 イザベル真央
 更衣いつか来た道あゆむ猿 池田 博臣
 虻払う象の尻尾や国防論 徳吉洋二郎
 春暁の玄関にあるさらの靴 吉野 精
 蟻と蜘蛛喧嘩に見とれる独り者 大塚 弘毅
 五月来る隣は空家となりしまま 股野 久子
 三步四方耕す陽気な未亡人 佐藤 晏行
 一面青田三面は社会面なり 金子 未完
 青空の形正しく鯉のぼり 小林 実
 鯉のぼりオオタニサンは風に乗る 村上 澄子
 門前にキリストを説く春の日に なかもと淑子
 人ならば古希「風太」初夏をよく眠る 檜垣 梧樓

第三一三回 (平成三十年六月十二日)

司会 池田 博臣

十葉の花の律儀に手をとめる なかもと淑子
 青柿のぼたりと落ちる子規の黙 岡田 淑子
 森青しアダムもイブも全裸なり 徳吉洋二郎
 絆創膏貼つておしまひさくらんぼ 深山きんぎょ
 ペットボトルの転がる終電緑の夜 前島きんや
 優婆夷来て優婆塞誘う片かげり 小林 実
 春キヤベツ一枚むいては君のため 横須賀洋子
 あんぱんの館が偏り梅雨出水 金子 未完
 諍いのあと十葉の白さかな 股野 久子
 山紫陽花今日も今日とて借り暮らし 白木 暢子

第三一四回 (平成三十年七月十日)

司会 徳吉洋二郎

梅雨が好き水道局のお姉さま 吉野 精
 華人王さん黄金虫のごと飛翔 池田 博臣
 黒南風やポストにつける南京錠 村上 澄子
 虎牌啤酒あり歯科医見習い三鬼あり 檜垣 梧樓
 はがね色の軍鶏雲を追う沖縄忌 佐藤 晏行

全員が負けるあそびや桃熟れる 小林 実
 不発弾ひそむふたりの夏野かな 吉野 精
 百歳のしりとり遊び星祭 深山きんぎょ
 噴水のびたりと止まり金正恩 徳吉洋二郎
 羽破れても不敵なるもんしろてふ 檜垣 梧樓
 草抜く人動くともなく動きおり なかもと淑子
 人逝きてくらくら炎天尾を残し 横須賀洋子
 アルバムの少国民の捕虫網 佐藤 晏行
 ルールのルから教わる燕の子 金子 未完
 夏の鉄橋真つ青なメロスの背 池田 博臣
 苔玉の盆栽ずらり古書店街 イザベル真央
 パリ祭や越路吹雪のラストシーン 岡田 淑子
 いざゆかむスカイツリーへ梅雨の明け 股野 久子
 夏の朝未来へ一歩踏み留む 白木 暢子
 白南風やゆつくり沈むサブマリリン 前島きんや

青葉研究会報告

(於：千葉市民会館・第五会議室)

第八十二回 (平成三十年五月二十四日)

司会 長井 寛

春の丘もりもり割つて駝鳥くる たけなか華那
 分母より分子の重き憲法記念の日 越野 雄治
 青蛙出羽三山を踏破せり 徳吉洋二郎

第八十三回 (平成三十年六月二十八日)

司会 棗 梢伊

父と子の黙の深さや蟬時雨 長濱 聰子
 月見草いまも砲台跡と呼ぶ 加藤 法子
 寸鉄帯びて少年の夏野原 池田 博臣
 深窓の麗人として竹夫人 細根 葉
 深深深カンテラ見つむ夏の隠者 たけなか華那
 木下閣ゲルニカ力の牛休みをり 鈴木まんぼう
 現し世の淵の深きを梅雨鮫 徳吉洋二郎
 かたつむり石なげてみる殻の奥 越野 雄治
 聞き逃す亦聞き逃す蓮開花 矢野 忠男
 谷深き川床広き河鹿かな 山崎 幸子
 路地裏と金魚の間合閣深く 小林 実

ががんぼやゴミ箱に秘す恋の反古 馬淵 津枝
 久闊をラインで詫びて時鳥 三須 民恵
 代牛ほどの深窓に籠りしか 並木 邑人
 禾偏や蟻螂生るを猫と見む 森井美恵子
 万緑や人を誘へる深き淵 棗 楢伊
 意味深の話あつけらかんと蠅 細野 一敏
 五月雨の漂白 君は龍を見たか 松崎あきら
 万巻の書籍春眠深くする 吉野 精
 さんずいの漢字の深み青時雨 石井紀美子
 万緑の余滴より生る浪の音 長井 寛

●第八十四回 (平成三十年七月二十六日)



庭園賜恩宮離濱

猛暑日が続いていたが、幸いにも当日は少し涼しくなり、予定の十六名全員が参加。隅田川のミニ船旅と浜離宮庭園の散策、句会、二次会を楽しんだ。
 案内 矢野 忠男
 司会 徳吉洋二郎

短冊を銜えて来たる瑠璃揚羽 小林 実
 松風の奥に炎帝鎮もれり 保坂 末子
 江戸の夏松の枝ぶり女ぶり 徳吉洋二郎
 ビル街の腓に花嫁御寮暑ツ 並木 邑人
 水上バス雲の峰行き宇宙船 森井美恵子
 容赦なき炎帝老松に力瘤 長濱 聰子
 涼しさは三百年の松の幹 加藤 法子
 船窓の四角さまさま夏景色 石井紀美子
 橋の下拾われ来た子夏のぞく 細野 一敏
 美男女女涼の句創る浜御殿 吉野 精
 「潮入の池」満ち足りて夏の紋 池田 博臣

絵簾や鴨をあざむく大観 越野 雄治
 河童忌やクレインをたらすビルの陣 矢野 忠男
 四囲にビル遠慮がちなる蟬の声 星野 一恵
 茶屋涼しつばめ三羽の釘隠し 山崎 幸子
 気風良き隅田川風夏の旅 鈴木まんぼう
 離宮こそ氣象異常あとの涼風 棗 楢伊

柏研究句会報告

●第七十二回 (平成三十年五月十二日)

端午の節句兄弟の食べ盛り 岡田 春人
 鷹が峰の緑深くに宗悦垣 井上けい子
 墳丘の風はまろやか栃の花 小林 俊子
 新緑や手ぶらで一步踏み出しぬ 小張 直子
 母の日や父のお臍が移動中 木之下みゆき
 幣を振り座五の降臨ありて朱夏 長井 寛
 千年の神杉二注連燦ゆる 佐藤 鈴子
 錯雑の地球の端の青葉騒 野口 京子
 好きなのは人參が中まで赤いこと 高橋 宗史

●第七十三回 (平成三十年六月九日)

ランゲルハンス島と喋る心臓麦の秋 木之下みゆき
 叔母を焼く山吹の黄の待ち時間 岡田 春人
 黄揚羽とむつびあう日は別人に 下村 洋子
 「ゆるして」と童女のノート桃の頬 佐藤 鈴子
 青嵐転がつて転がつて紙コップ 野口 京子
 五月雨音たとえば「弥生語」喋るとき 高橋 宗史
 春風や微熱のような愛逃げる 栃木 きよ
 漱石の人間探求緑美し 小林 俊子

冷蔵庫の暖^{あたたか}聞^きいてるパンの耳 長井 寛
 青葉冷ゆるしてゆるしてゆるしてと 井上けい子

●第七十四回 (平成三十年七月十四日)

祝舞の扇の呼吸揃いけり 野口 京子
 黒南風や隠れ切支丹遺る島 井上けい子
 アンパンに臍食パンに耳炎暑 松澤 龍一
 初蟬や暗黙めく瞳交す朝 佐藤 鈴子
 黙禱の放射線上夏哮る 小林 俊子
 蝸牛愛せる少年消えたきり 高橋 宗史
 山車を曳く稚児の鼻筋半夏雨 長井 寛

新会員・会友紹介

柏市篠籠田 大園 智子(会員)
 (推薦者 岡田 淑子)

天帝の雨に色あり濃紫花
 憂国の地軸を探すなめくじり
 黒揚羽わが身の影を攫いたる

野田市山崎 上杉 良身(会員)
 (推薦者 秋尾 敏)

葱坊主枯れて子のない車寄せ
 梅雨の星それ見たことか忘れ物
 少年の夢は水草花の中

匝瑳市時曾根 林 哲(会員)
 (推薦者 高野ムツオ)

句浮かぶ特に鳴焼食ふときに
 田の神の声かも知れず青田風
 一瞬を集ふ仲なり天の川

図書紹介

■句集『水平線』 中嶋 三雄

平成三十年五月十五日刊 東京四季出版

早乙女や支流東なす日田盆地
着ぶくれて大東京にゐる孤独
どこからも水平線や安房の夏

■『高木一恵句集』 高木 一恵

平成三十年五月十八日刊 角川文化振興財団

美しい卵が二つ冬の家
古りしわが五体百態ねむの花
みちのくの沈みきれない紙の雛

■合同句集『俳句の杜』より

平成三十年六月三十日刊 本阿弥書店

田端重彦
堅香子や耀歌の山を目覚めさせ
消灯は無言の行や登山小屋
マッターホルン雪割草に角撓め

ひろば

■受賞のお知らせ

◆第五回俳句四季特別賞

『俳句の底力』 秋尾 敏

平成二十九年六月刊 東京四季出版

(会報一二六号で紹介済)

◆第三十二回千葉県俳句作家協会賞

次席「信書」 林 ゆみ

■千葉県俳句作家協会総会・俳句大会開催

平成三十年五月六日(日) 千葉市「ホテル
プラザ菜の花」において開催された。出席者
六十五名。

俳句大会上位入賞者と代表作品(二句の内一句)

- ① かげろふをひとゆすりして出航す 原 瞳子
 - ② 蝶の昼耳から眠くなりけり 谷本 元子
 - ③ 結び目を解けばたちまち風五月 細根 葉
 - ④ 索引は別巻にあり穀雨の夜 能村 研三
 - ⑤ 恋猫の知り尽したる神楽坂 金子日出子
 - ⑥ 逆風を力に変へて鯉のぼり 茶屋 静子
 - ⑦ 春眠のなかを大きな象あゆむ 塩野谷 仁
 - ⑧ 人麻呂も虫麻呂もいて花の闇 清水 伶
 - ⑨ 鬱の字のほどけぬままに青き踏む 椿 良松
 - ⑩ たんぼぼの笑ふ光の中にある 染谷 卓
- (真木一八六号)より)

《会員・会友の近況》

・〈卒寿超え何が目出度い除夜の鐘〉(九十
三歳矢張り目出度し初日影) 今年の年賀状、
富嶽暁暗の画に添えた句です。世間様は老
境を親切に教えてくれますが、勝手な毎日
です。(佐久間眞城)

・今一番辛いのが脊椎管狭窄症ですが、長男
に病気の百貨店と命名されつつ入退院を繰
り返しています。そうは言っても俳句を考
えている時はどこも痛くないのです。私に

とつて俳句は葉なのかもしれません。

(千葉 信子)

・もうすぐ喜寿を迎えるが、小学生の時の教
師は今も御健在。常々人はきょういくときよ
うようが必要と仰せである。この年になつ
てもとお話しをよく聞けば、今日行く所今
日する用事だそうだ。呆けない秘訣は「きよ
ういくきょうよう」と心掛けている。

(高橋富久江)

・目が悪くなり、歯もガタが来て、他にも体
力の衰えを感じる今日この頃で、医者通い
の日に増してきました。俳句も結構体力を
使うものだと感じています。愚痴をこぼし
ながら頑張ります。(富田 茂)

・夏祭の季節が近く極めて多忙な日を送つて
います。後継者難のため神社の責任総代も
やめられません。健康で過ごせますことに感
謝し、暫く頑張ってみようと思えます。

(戸邊 光一)

・サークルの仲間に入れて頂き五年経ちました。
夫の介護・通院・近所・親戚の付き合い等で
毎日慌しく過ぎる時の中で、ふと気づいた事
や思った事をそのまま書いていただけで、何
の進歩もないのですが、良き仲間達の中で月
に一度の俳句会を楽しんでおります。

(大地 節子)

・うちには出現しないし、わたしは道産子だし、
ゴキブリは嫌でも怖くもなく、ただの虫です。
バンと手でたたいてポイツと捨てたら同僚達

がどよめきました。しかしその目の奥に（こいつ人間じゃネエノ）という震えの色をわたしは見逃がさず。北海道にゴキブリがいないから「刷込み」が無いだけで相手がカマドウマならそうはいきません。飛びつかれたら気絶します。あのまんまるい牛模様の頭とぶつとい太もも。想像するだけで心臓バクバクです。

（たけなか華那）

● 老後の愉しみにと始めた俳句も、はや四半世紀になるうか。未だ迷界を彷徨っている。一生修業のつもりです。

（関根 信三）

● 今年は暑いせいか、ねむの花がやけに元気で波打つようにたわわに咲いています。葉の蔭は特に繊細で花そのものもやさしく美しいですね。

（徳田 悠子）

● 金子兜太お別れ会が六月二十二日に朝日ホールにて催された。大勢の俳人たちは祭壇の遺影に一本ずつ白菊を捧げて別れを惜しんだ。万民に愛された金子兜太。『現代俳句』七月号と八月号は金子兜太追悼特集号である。日々その編集作業に追われている。

（長井 寛）

● 〈穏やかや日差し追いか秋の蝶〉白寿の誕生日に義姉が披露した句です。美しく齢を重ねた姉をうらやましく、そうありたいと願う昨日今日です。

（永井 奈々）

● 俳句を始めて十年余り。一向に上達の兆しもなくスランプ状態が続いておりますが、先輩や仲間を支えられて何かと続けております。

（坂本千恵子）

● 定年後公民館と自宅に茶道教室を開きたのしんで来たが、卒寿を迎えもっぱら俳句だけに専念しております。昭和二十六年より始めた俳句なのですてきならず、へたはへたなりにたのしみ続けております。

（千野湘山人）

掲示板

△ 会員・会友異動

● 入会

（会員） 中根文子、林みさき、山崎和久、吉田耕史

● 退会

（会員） 流 香、小高桂子、浜口榮代、廣谷幸子、岩尾可見、大木明子、柏井 笙

● 移転

（会員） 片岡秀樹（柏市末広町へ地区内移転をがはまなぶ）松戸市富蟹平番地変更

△ 平成三十一年度第二回幹事会

日時 平成三十年五月二十二日（火）

午後六時より

場所 船橋市勤労市民センター
議題

- 一、平成三十一年度総会・俳句大会の結果、収支報告等
- 二、現代俳句協会（本部）の動向について
- 三、各地区協総会・俳句大会の報告について
- 四、三二吟行会、春の吟行会の結果、収支報告等
- 五、秋の吟行会の計画について
- 六、第一二九号会報について
- 七、創立四十周年記念事業について
- 八、平成三十一年度俳句大会について

- 九、関東甲信越静ブロック連絡会議について
- 十、各研究句会の状況について
- 十一、その他
 - ① 会員・会友の入退会状況
 - ② 公共施設での俳句活動について
 - ③ 次回幹事会 八月二十八日（火）

□ 事務局・編集部だより □

● 平成最後の総会・俳句大会は平成三十一年三月十七日（日）です。俳句大会の投句締切が一月三十一日。五か月間は意外に早く過ぎるかも知れませんが、これから、初秋・仲秋・晩秋、そして初冬・仲冬と、どんな物語が皆様に展開するのでしょうか。

● 季節の移行ごとに句をためて投句して下さると句稿が豊富にもなり有難いと思います。重ねてのお願いになりますが、どうぞよろしく。秋の吟行会、平成三十一年度俳句大会のチラシを同封しています。皆様お誘い合わせの上ご参加下さい。

<p>現代俳句千葉 第一三〇号 平成三十年九月一日発行</p>	<p>発行人 千葉県現代俳句協会 会長 秋尾 敏</p> <p>現代俳句千葉編集部 〒261-0004 千葉市美浜区高洲 三十五-六-一六〇二 徳吉洋二郎</p> <p>千葉県現代俳句協会事務局 〒278-0043 野田市清水五 二七-一〇 高橋 宗史</p> <p>TEL・FAX 〇四一七一二五-三三八二</p>
-------------------------------------	--